

# ベルリンのユダヤ人救済者たち

——ユダヤ人を救った人々(12)——

## Die Judenretter in Berlin

平 山 令 二

### 要 旨

第三帝国の首都であるベルリンは、強制移送を逃れ地下潜行したユダヤ人の数が一番多かった。ドイツ敗戦時には約6000人のベルリンのユダヤ人が生き残っていた。それらの人々の救済に命を懸けたベルリン市民の数も膨大であった。ユダヤ女性、ズザンネ・マイヤーの場合を見ると、彼女を助けた救済者は20人以上におよぶ。少なく見積もっても、ベルリンのユダヤ人救済者は総数で5万人近くはいたと思われる。彼らの世界観はさまざまで、共産主義者、社会民主主義者、自由主義者、キリスト教徒、それどころか保守的国家主義者もいた。身分もさまざまで、カトリック神父、大地主、上級公務員、貴族や、ジャーナリスト、労働者、さらに迫害されたユダヤ人自身が他のユダヤ人の救済者であった例もある。そのように多様なユダヤ人救済者の共通点は、命懸けでユダヤ人同胞を救いたいという固い意志とナチス体制に対する抵抗心である。

### キーワード

ベルリン、ユダヤ人救済者、さまざまな世界観、さまざまな身分、反ナチス

これまで「ユダヤ人を救った人々」という本シリーズで取り上げたユダヤ人救済者のうちで、一番多かったのはベルリンの救済者たちであった。これは、第三帝国の首都であり、ドイツ敗戦時に生き残ったユダヤ人地下潜行者の数は、ベルリンが一番多かったから、当然のことであると言えるだろう。しかしながら、多数いるベルリンのユダヤ人救済者のなかでこのシリーズで紹介できたのは、ほんの一部にしか過ぎない。そこで、今回は

これまで紹介していなかったベルリンのユダヤ人救済者を網羅的に紹介してみたい。

## 1. マリア・マルツァン伯爵夫人——ゾルフ・サークルの生き残り

マリア・イザベル・ヘレーネ・フォン・マルツァンは、1909年3月25日、シュレジア（現チェコ）のミリチュに生まれた。彼女はベルリンの少女寮でユダヤ人の同級生と知り合いになった。ミュンヘン大学で動物学と獣医学を専攻し、博士号を取得した。早くからナチス独裁政権の犯罪的性格を認識していて、反ナチス組織に参加し、ナチスの政権奪取後、ゲシュタポに何度も尋問された。そのため、マルツァン伯爵夫人はアフリカに移住したが、1935年にはドイツに帰国した。1939年にユダヤ人のハンス・ヒルシエルと恋におち、「人種法」にもかかわらず恋愛関係を続けた。ヒルシエルは1942年に強制移送されることになったが、自殺を装って跡をくらました。ヒルシエルはその後、ゲシュタポに発見されることはなかった。

マルツァン伯爵夫人はその後、カトリック抵抗運動の指導者であるイエズス会神父、フリードリヒ・ムッカーマンと接触し、彼を援助した。ムッカーマンの依頼で反ナチス印刷物を外国から密輸した。またスイスの信徒会による1944年10月のスペクタクルのようなユダヤ人救出作戦にも関与した。スウェーデン国籍の市民が、ベルリンから封印された列車の車両で、スウェーデンの自宅に持ち出すことが許された家具を入れた箱のなかに、40人のユダヤ人を隠れさせ、国外に脱出させた。その他、マルツァン伯爵夫人は、いわゆる「ゾルフ・サークル」の会合にも定期的に参加した。サークルのメンバーのほぼ全員が、のちにゲシュタポに逮捕され、民族裁判所で死刑を宣告された。彼女は、お尋ね者のユダヤ人に隠れ家を提供し、逃亡者のために贋造された書類を組織的に作成した。それどころか、自ら積極的に逃亡を助けることすらした。逃亡者たちといっしょにボーデン湖

を安全なスイスの岸まで泳いで渡ったのだ。全体で60人以上を救済し、1987年にヤド・ヴァシェムで「正義の人」として顕彰された。彼女は2009年3月にベルリンで亡くなった。

## 2. ゴルフ・サークル

ヨハンナ・ドットティは1887年に生まれ、1908年に太平洋サモアのドイツ植民地の総督、ヴィルヘルム-ハインリヒ・ゾルフと結婚した。ゾルフは1920年から27年まで日本のドイツ大使だった。1928年からヨハンナはベルリンに暮らし、夫のゾルフはベルリンで亡くなった。彼女はベルリンの住居で、しばしば外務省の反ナチス官僚や同じ考えの人々とお茶会の名目で会合を開いた。ゾルフの娘、ラギ・フォン・パレシュトレームは上海ですでに反ナチスの人物として目立っていて、ベルリンで2回ゲシュタポの尋問を受けた。

ゾルフ夫人は、政治的あるいは人種的に迫害された人々の国外逃亡を支援した。1943年夏、ゲシュタポは若い医師、パウル・レックツェーをゾルフ・サークルに送り込んだ。スイスとのコネがあり、スイスの亡命者とドイツの抵抗グループの仲介ができる、という触れ込みだった。その結果、1944年1月、多くの人々が逮捕され、エリーザベト・フォン・タッデンが死刑判決を受けた。ゾルフ夫人はガルミッシュで逮捕され、ミュンヘンで何日も尋問されたが、サークルのメンバーの名前を誰ひとりもらさなかった。それからザクセンハウゼンの強制収容所に入れられ、1944年3月15日、ラーフェンスブリュック女性強制収容所に移された。そこには娘のラギもすでに移送されていた。「ゾルフと他の5名」事件の審理期日を民族裁判所長のローラント・フライスラーは、1945年に決めたが、2月3日にフライスラーは空襲により死亡した。リヒャルト・キュンツァーとアルブレヒト・グラーフ・フォン・ベルンシュトルフは1945年4月に処刑された。1945年

4月28日に延期されたゾルフ夫人と他の5人に対する審理は開始されなかった。ベルリンがすでに赤軍に占領されていたからだ。

釈放後、ゾルフ夫人は、ゾルフ・サークルの70人以上のメンバーがゲシュタポの犠牲になった、と聞かされた。彼女の体重は40キロを切るまでになっていた。ニュルンベルク裁判で彼女は証人として、23人の主要な戦争犯罪人の罪状について証言をした。

### 3. カトリック神父、ベルンハルト・リヒテンベルク

1875年12月3日、ベルンハルト・リヒテンベルクはニーダーザクセンのオーラウで生まれた。プレスラウとインスブルックで神学を学んだあと、1899年に神父に叙任された。1900年からベルリンの労働者地区であるフリードリヒスハイン-リヒテンベルクで助任司祭として働き始めた。1920年代にシャルロテンブルクの市行政会議の中央党議員となり、1926年、その功績に対してモンシニョールの称号を授与された。カトリック教徒に映画「西部戦線異常なし」を観るよう呼びかける署名をしたために、ナチスの権力奪取以前に、すでにゲッベルスの論文で攻撃的になっていた。ユダヤ人商店のボイコットが始まる前日、ユダヤ人銀行家とドイツ司教会議長アドルフ・ベルトラムの会合を手配した。しかし、ボイコット反対の態度をベルトラムに取らせることはできなかった。

すでに1935年に親衛隊グループ指導者ラインハルト・ハイドリヒは、説教乱用罪と国家反逆罪でリヒテンベルクを起訴するように求めていた。それ以前、リヒテンベルクは、プロイセン内務省でエスターヴェーゲン強制収容所の状況について報告をした。彼は迫害された人たちに必要な物資を密かに支援していた。ユダヤ人には地下潜行させる支援をした。1938年8月、「ベルリン司教区庁援護団」の団長になった。ユダヤ系カトリック教徒の亡命を助ける組織だった。

「水晶の夜」のあと、リヒテンベルクは、ユダヤ人迫害に公然と反対するただひとりの神父であった。そのときから、リヒテンベルクは毎日のミサの際に、ユダヤ人や他の迫害された人々のために祈り、開戦後には、防空壕での「人種隔離」命令を批判した。ミサに参列したふたりの女子学生に密告され、1939年12月14日、リヒテンベルクの家宅捜索が行われ、次の土曜日に予定されていた説教の草稿が見つかった。そのなかでは、ユダヤ人救済活動に警告する宣伝省のビラが批判されていた。尋問では、リヒテンベルクは、非キリスト教的であるヒトラーの『我が闘争』をカトリックの神父の立場から批判しなければならない、と明言した。

1942年5月、すでに重病だったリヒテンベルクは、説教乱用罪で有罪とされ、テーゲル刑務所に収容された。ダッハウ強制収容所への移送を待つあいだ、リヒテンベルクは1943年11月5日に死去した。2004年、「正義の人」としてヤド・ヴァシェムで顕彰された。

#### 4. ハインリヒ・グリューパーと「グリューパー事務所」

ハインリヒ・グリューパーは、1891年6月24日、ライン地方のシュトルベルクに生まれた。彼は流暢にオランダ語を話し、ユトレヒト大学で神学を学んだ。第1次世界大戦では砲兵に志願した。1920年、ベルリンで牧師に叙任された。グリューパーは反動的な「鉄兜団」の一員になったあと、1933年初めナチス党に入党した。この時期にはウッカーマルクの教会学校の校長をしていた。しかし、黨員だったのはわずかな期間で、そのあとマルティン・ニーメラーをリーダーにした「牧師緊急同盟」に加盟した。同盟は、ユダヤ系キリスト教徒への「アエリア人条項」の拡大を阻止することを使命にしていた。グリューパーは学校長の職を失ったが、ベルリン東部の郊外にある、カウルスドルフの牧師の職を任された。その間、彼はナチスのイデオロギーを拒絶するようになっていた。ベルリンのオランダ人

信徒を監督する立場になり、幅広い人々と接触できるようになり、ユダヤ人や彼らの移住計画を知った。

「ユダヤ系キリスト教徒」の状況がますます困難になってきたため、告白教会の地下指導部は1939年、グリューバーに迫害を受けている信徒のために中央救済組織を創設する仕事を依頼した。こうして、1938年のベルリンにおける「水晶の夜」の数週間後、「グリューバー事務所」が開設された。ここから救済のネットワークが全ドイツに広がった。その結果、1939年2月には毎日、30人を超える職員が約130人のユダヤ人の国外移住申請を処理していた。最初、ゲシュタポもグリューバーが私的に主宰する事務所を大目に見ていた。この時点では、ユダヤ人の国外移住がまだドイツの人種政策の目標であったからだ。シュテッティンのユダヤ人が強制移送されたときに、グリューバーがあらゆる高官に対して抗議したため、ゲシュタポに召喚され、警告を受けた。バーデン・バーデンとファルツのユダヤ人がフランスのヴィシー政府支配地に強制移送されたときにも、ふたたび抗議の声をあげたが、移送を止めることはできなかった。1940年の終わりにグリューバーはゲシュタポに逮捕され、1943年6月半ばまで収容された。

1964年7月、ヤド・ヴァシムで「正義の人」として顕彰され、1970年、ベルリンの名誉市民になり、1975年にベルリンで亡くなった。

## 5. 抵抗グループ「エミールおじさん」

1938年冬、抵抗グループ「エミールおじさん」がルート・アンドレアス・フリードリヒとレオ・ボルヒャルトにより設立された。「エミールおじさん」は危険を知らせる合言葉として使われたものである。グループのメンバーは初め9人だったが、のちにはもっと増え、迫害されたユダヤ人に隠れ家や食料、偽の証明書などを提供した。その他「白バラ」のビラの配付や、「Nein」という言葉を無数の家々の壁に描いたり、政治犯の家族の救

援活動をした。

ルート・アンドレアス＝フリードリヒは1901年9月23日、ベルリンで生まれ、1922年ケースワーカーの国家資格を取得したが、1920年代からジャーナリストとして働き始めた。結婚して娘のカーリンを産んだが離婚し、1930年代から指揮者のレオ・ボルヒャルトと生活をともにした。なお、カーリンはのちに「エミールおじさん」のメンバーになった。

レオ・ボルヒャルトは1899年、モスクワに生まれ、ケーニヒスベルクで指揮者として活動し、戦時中はベルリンでフリーの指揮者だった。

すでに1938年の「水晶の夜」の際に、大勢のユダヤ人の友人がベルリン南西部のシュテグリッツにあるルートの住まいに避難し、テロが過ぎ去るのを待った。彼女の住まいはその後の救援活動の中心になった。救済者たちは国外亡命者たちに高価な物品を郵送した。亡命者たちは10マルクしか国外持ち出しが許されなかったからだ。

1941年、ユダヤ人収容施設グリュッサーウから食料を求めるマルゴット・ローゼンタールの手紙がルートに届き、グループは「困窮者用」の食料切符を集め始めた。やがて迫害されたユダヤ人のために宿泊所を用意する活動となり、そこでは食料や医師の治療も提供された。その他、ルートと娘のカーリンは逃亡ユダヤ人たちを何人も一時的に受け入れる活動を続けた。

レオ・ボルヒャルトは、ドイツの降伏後の1945年8月23日、アメリカ兵に射殺された。停車を命じられたのに、自動車を止めなかったからだ。ルート・アンドレアス＝フリードリヒは1977年9月7日に自殺した。彼女は2002年にヤド・ヴァシェムで「正義の人」として顕彰された。

## 6. ダーゴベルト・レーヴィンのオデッセイア

1943年2月27日、ベルリンのユダヤ人、ダーゴベルト・レーヴィンが、修理工として働いている工場に入ったとき、非ユダヤ人 коммуニストのハ

インリヒに、強制移送が目前だ、という警告を受けた。ダーゴベルトの両親はすでに強制移送されていた。両親の住まいは没収されていた。彼には友人が少なかったし、金もそれほどなかった。それなのに、妻のイルゼと5歳になる妻の息子クラウスを守る責任があった。イルゼと結婚したのは、彼女とその息子をゲシュタポから守るためだった。イルゼの勤務していたユダヤ病院では独り者がまず強制移送されたからだ。ユダヤ人労働者を工場など勤務先からそのまま強制移送する「工場作戦」により、ダーゴベルトと家族は潜行生活に入らなければならなくなった。そのときから他人の助けに頼るほかなくなった。オデュッセイアの放浪が始まった。

ハインリヒの紹介で、ベルリン近郊リュールパルスのクジツキー家に向かった。クジツキー家はカトリックで、ナチズムを拒否していた。しかし、そこに長くとどまることはできなかった。ダーゴベルトは貴重品をわずかしか所持していなかった。バックルに高価な切手を隠しているベルトがそれだった。ユダヤ人の友人、ヒルシェフェルトが切手を売る手助けをしてくれた。その金で食料切符を手に入れることができた。彼は空襲で廃墟となった家で過ごさなければならなかったが、妻のイルゼは家政婦として暮らしていくことができた。ダーゴベルトは、数日間眠りやすい場所で過ごし、またすぐ新しい場所を探す、といった生活を続けた。昼間は、一カ所に長くとどまり人目を引かないように、ベルリンの町をあてどなくさまよった。そうしているうちに、元同僚のハインリヒのことを思い出した。ハインリヒはふたたび隠れ家を教えてくれた。今度は目の不自由なパウルとレギーナのリヒター夫妻の家だった。受け入れてくれたお返しに、ダーゴベルトとイルゼは、リヒター夫妻ができないことをした。4週間の田舎への旅行のお供し、リヒター夫妻の小さな別荘で彼らは1か月過ごした。ダーゴベルトは庭師、職人、助手、イルゼは料理人と掃除婦の役を勤めた。

その後、彼は友人のユダヤ人、ギュンターに出会った。ギュンターも「U



ボート」(潜行ユダヤ人)としてベルリンで暮らしていた。ダーゴベルトはギンターとスイスに脱出する計画を立てた。逃亡用の自動車をゲシュタポから盗み、人目につかないところに隠しておいた。ギンターは、身分証明書、ナンバープレート、その他必要な物を用意した。しかし、ふたりがスイスに向かおうとしたまさにそのとき、崩れ落ちてきた建物に車がはさまれ、動かなくなってしまった。そのため計画を放棄せざるを得なくなった。

ちょっとした息抜きができる時も何度かあった。ギンターのガールフレンドの父親は親衛隊の士官で、ダーゴベルトとギンターに、フランクフルト・アン・デア・オーダーにある親衛隊員の教育施設に新しいプロジェクトを設置する仕事を依頼した。父親はふたりに親衛隊の制服と、仕事の証明書を手配した。何日間か、彼らは正式な職による特権を享受し、親衛隊の食堂でたっぷり食べることができた。

その後、ダーゴベルトは、エホバの証人の信者であるシュトルツェ家の自動車工場に職と宿を見つけることができた。しかし、この隠れ家にも長くはいられなかった。わずか3か月後に工場はゲシュタポに接収されることになったからだ。

証明書も金もないダーゴベルトには、他の町に移る可能性はなかった。仕方なくベルリン郊外の森に行こうと決心した。だが、森で食料を手に入れることはとても困難だった。ダーゴベルトは木の葉を食べ、小川の水を飲み、人の住んでいない家を探した。

結局、ダーゴベルトはゲシュタポの手に落ちた。しかし、空襲でゲシュタポの監獄に爆弾が落ち、そのすきに逃亡することができた。栄養失調と虐待のため疲れ果て、レープレヒト家にやっとの思いでたどり着いた。レープレヒト家の息子たちと工場でいっしょに働いていたからだ。1945年4月15日ようやく、ダーゴベルトのオデュッセイアの旅は、レープレヒト家

の玄関で終わった。妻のイルゼと義理の息子クラウスは強制収容所に移送されたが、連合軍に解放された。クジツキー家の人々は、かくまっていたイルゼたちが逮捕されたあともゲシュタポにつきまといわれることはなく、ユダヤ人救済者たちを見舞った通常の運命を逃れることができた。

ダーゴベルトは、都市の遊牧民として2年間、危険な時代を生き延びることができた。それは、自身の勇気、執念、生きる意欲のおかげだったが、それ以上に反骨心のあるベルリン子たち、ドイツ人の救済者としての抵抗のおかげだった。戦後、ダーゴベルトはアメリカ合衆国に移住した。

## 7. ケーテ・ローゼンハイムとベルリン子ども移住事務所

1892年1月13日、ケーテ・ローゼンハイムはベルリンに生まれた。1909年から1912年にかけてベルリンの女子社会福祉学校に通い、ケースワーカーの資格を得て、さらに乳児専門看護師の教育を受け、大学のゼミナールにも参加した。ナチスに仕事を奪われるまで、彼女は青少年福祉のさまざまな局面の仕事に従事し、最後に1930年から33年までベルリン警察本部福祉部長として勤務した。その後、ドイツのユダヤ人中央福祉局で働き、16歳以下の子どもたちの国外移住部門を統括した。1938年11月のポグロムのあと、彼女は自らイギリスへの移送に付き添った。1939年8月までに、ローゼンハイムと同僚たちは7200人の子どもたちを国外に送り出し、その命を救った。開戦とともに逃亡の可能性は消滅した。1941年10月、ユダヤ人のドイツからの亡命は最終的に禁止され、子どもの移住部門のベルリン事務所は閉鎖しなければならなくなった。1941年のうちにローゼンハイムは母親といっしょにアメリカ合衆国に亡命し、1979年12月4日にそこで亡くなった。

## 8. ヘレーネ・ヤーコプスとフランツ・カウフマン

ヘレーネ・ヤーコプスは1906年にベルリンに生まれ、ユダヤ人弁理士の秘書として働き、1934年から告白教会の会員になった。1940年、ユダヤ人を助けるキリスト教徒のグループに参加した。グループの設立者であるフランツ・カウフマンは、1886年1月5日ベルリンに生まれ、1908年に法学部を卒業し、司法試験に合格したが、1914年に徴兵された。戦場でいくつもの勲章を授けられたが、1918年機関銃により重傷を負った。怪我の後遺症は生涯続いた。1919年キール大学で博士号を取得し、1919年と22年にベルリン市さらにベルリン・シャルロッテンブルク地区の参事に勤務し、最後は上級参事に昇格した。内務省と財務省で働いたあと、上級行政事務官に1927年昇進した。

すでに1940年にヤーコプス、カウフマンとグループのメンバーは、シュテッティンからルブリンに強制移送されたユダヤ人に食料と衣料を送る活動を組織した。1941年10月終わりにベルリンでも強制移送が始まると、グループの一部のメンバー（ヤーコプス、ヒルデガルト・ヤコービ、ヒルデガルト・シェーダー、ゲルトルート・シュテーヴェン、メラニー・シュタインメッツ）はユダヤ人をかくまう活動を始めた。何人もの告白教会員もユダヤ人に食料切符を与え、隠れ家を提供した。シオニスト・グループ「チュク・チャルツィ」（バイオニア・サークル）のエーディト・ヴォルフに、カウフマンは闇市で手に入れた食料切符を与えた。1943年6月13日、ヤーコプスはお尋ね者のユダヤ人グラフィック・デザイナー、チオマ・シェーンハウスを自分の住まいにかくまった。ヤーコプスなどの救済者たちのおかげで、シェーンハウスは表面上は合法的な暮らしを送ることができるようになり、約200人に偽の証明書を作成した。

フランツ・カウフマンは1943年に密告により他のメンバーと一緒に逮捕

され、最後にザクセンハウゼン強制収容所で殺害された。他方、ヘレーネ・ヤーコブスは食料切符を渡した罪と、証明書偽造罪のみで告発され、禁固刑を言い渡された。彼女の救済行為の本当の姿は隠されたままだった。ヘレーネ・ヤーコブスは1993年8月13日、ベルリンで死去した。1983年、ヤド・ヴァシエムで「正義の人」として顕彰された。

## 9. チュク・チャルツイー——パイオニア・サークル

シオニスト青年組織のいくつかは開戦後も密かに活動を続けた。1941年10月、ナチス当局はシオニスト職業訓練センター（ハカシュラ）を強制労働施設に改造するよう命令した。ユダヤ青年支援組織の文化部で働いていたエーディト・ヴォルフは、1942年にシオニストの青年組織をすべて地下組織にするというプランを立てた。

エーディト・ヴォルフは1904年4月13日、元キリスト教徒のユダヤ人家庭に生まれた。1933年、両親はナチスに対する抗議の姿勢を示すため、プロテスタントからユダヤ教に改宗し、シオニストになった。この上もなく危険な行為だったが、両親は政治的なパンフを配付し、迫害された人々とコンタクトを持ち、逃亡する手助けをした。レーヒャ・フライヤーを介してヴォルフは「青年アリヤー」に加わり、シオニスト・グループの指導者、イツハック・シュヴェルゼンツと知り合った。シュヴェルゼンツは1942年8月末に潜行生活に入っていた。1943年2月、ヴォルフとシュヴェルゼンツは一緒に、シオニスト青年地下グループのチュク・チャルツイーを組織した。同組織は1年以上にわたり、逃亡の援助やドイツで生き延びる手助けをした。

潜行したシオニスト青年たちは、本来の救援の仕事を難しくする大きな困難に直面していた。自分用の一定期間で変えなければならない安全な宿の他に、食料、証明書、金を手配しなければならなかった。ドイツ当局が

彼らを追跡していた。ボートでスウェーデンに脱出する計画を放棄しなければならなくなったあと、シュヴェルゼンツはスイスへの逃亡計画に力を集中した。偽造した証明書のおかげで、最後にはスイスに逃亡することができた。ジュネーブでシュヴェルゼンツはヘハルツ組織と接触した。ヘハルツはベルリンに送金し、その金でチュク・チャルツィは地下組織を維持することができた。まだ21歳の若いガート・ベックの指導のもとで、赤軍によって解放されるまで、チュク・チャルツィは生き延びることができた。設立者のエーディト・ヴォルフは、1943年にゲシュタポに逮捕され、18もの矯正施設と強制収容所を転々とし、多くの苦しみをなめたが、解放まで生き延びることができた。

## 10. コミュニストのアウグスト・ザパンドウスキー

もっとも勇敢なユダヤ人救済者のひとりで、何度も救済行為を繰り返し、その代償に命を落としたユダヤ人救済者は、1882年6月、西プロイセンのリッサで生まれたアウグスト・ザパンドウスキーだった。元カトリック教徒のコミュニストとしてナチスの人種理論を断固として拒否した。1941年から、法律で禁止されていた、ユダヤ人女性のエルスベート・オルグラールとベルリンで暮らした。1942年、ヴェルツブルク生まれでベルリンのラビ助手であるヘルベルト・シュトラウスがザパンドウスキーに助けを求めた。ザパンドウスキーは恋人のロッテの手を借り、オルグラールをラウバッハ通りの地下室に連れて行った。そこにはすでに何人ものユダヤ人が潜伏していた。ユダヤ人をかくまったことは人目につき、密告された。逮捕を逃れるために、ザパンドウスキーは恋人と数か月間オーストリアに逃れた。1943年に元の住まいに戻り、少ししてゲシュタポに逮捕された。エルスベート・オルグラールはアウシュヴィッツに移送され、殺害された。ザパンドウスキーは3か月の禁固刑に服した。釈放されるとすぐに、また何人ものユダヤ

人をゲシュタポの魔手から助けた。自宅で、ふたりの子どもを持つユダヤ人夫妻をかくまった。あらたに密告され、ザクセンハウゼン強制収容所に移送され、さらにベルゲン・ベルゼン強制収容所に移送され、そこで殺害された。2001年、ザバンドウスキーは「正義の人」として顕彰された。ヘルベルト・シュトラウスは1943年6月、スイスへの逃亡に成功し、さらにアメリカに移住した。ニューヨークで歴史学教授となり、反ユダヤ主義研究センター創立時の所長となり、ユダヤ人救済史の研究をして、出版した。

## 11. ヴェルナー・シャルフ、ハンス・ヴィンクラーと 「平和と再建のための共同体」

ほとんど知られていないが、極めてアクティブな抵抗グループのひとつが、ヴェルナー・シャルフによって設立されたグループ「平和と再建のための共同体」である。グループはベルリン近郊のルッケンヴァルデから何千枚ものビラを配布し、ナチス政権に抵抗した。

ヴェルナー・シャルフは1912年にポーゼンに生まれた。のちに一家はベルリンに引っ越した。大学に進学したかったが、ユダヤ人敵視の法律と、家族を養う必要のため、職人にならざるを得なかった。ユダヤ系企業で電気設備工として働いた。企業はベルリンのユダヤ人共同体のほとんどの建物の電気設備を請け負っていた。1941年からユダヤ人共同体の電気設備工として、モーアビットにあるシナゴグで働いた。そのシナゴグは強制移送用集合施設に改造された。シャルフはゲシュタポ職員の住まいの私的改修工事もしてやり、彼らの信頼を得て、強制移送者のリストをのぞき見することができた。リストに載っているユダヤ人にしばしば警告を与え、一時的ではあるが彼らの命を救うことができた。1943年2月27日の「工場作戦」によって、ベルリンでまだ合法的に暮らしていたユダヤ人が強制移送されることになったとき、シャルフはすべての知人や友人に警告を与え

た。逮捕された弟のシュテファンに電気設備工の格好をさせ、収容所から脱走させることにも成功した。

1943年6月10日、シャルフは妻のゲルトルート・ヴァイスマンと女友達のフランシア・グリューンと非合法生活に入った。7月にゲシュタポに逮捕され、テレージエンシュタット強制収容所に移送された。しかし、9月7日に収容所を脱走に成功し、ベルリンになんとかたどり着くことができた。強制収容所で友人のギュンター・ザムエルがベルリン近郊ルッケンヴァルト在住の非ユダヤ人ハンス・ヴィンクラーの住所を教えてくれた。37歳のヴィンクラーは、18年前からルッケンヴァルト地方裁判所事務官として働いていた。彼自身は政治に関心がなかったが、ゲシュタポの尋問や拷問に記録係として立ち会ううちに、ナチス政権に対する態度を変えることになった。すでに彼はユダヤ人の若者、オイゲン・ヘルマン-フリーデを自分の家にかくまっていた。1942年、ヴィンクラーは「高い掛け金の儉約会」を組織し、その金で潜行生活をしているユダヤ人のために食料品を買った。ヴィンクラーと妻のフリーダは、ナチス政権に対する闘いに専念した。

1944年初め、シャルフはナチス政権の犯罪的性格を暴露するビラ配布を始めた。最初のビラは「熟考するために。敵が聞き耳を立てている」という題だった。ビラは千枚も増刷りされ、電話帳に載っている住所を書いて郵便ポストに入れられた。1944年4月と8月にさらにビラが配布され、発行人として「平和と再建のための共同体」というグループ名があげられていた。第三帝国の他の都市でも活動しているように見せかけるために、ビラはグループのメンバーが旅行するさい持参し、ハレ、カールスバート、さらにロッテルダムでも投函された。

1944年10月と12月、グループのほとんど全員が逮捕された。ユダヤ人以外のメンバーは民族裁判所で、内乱罪と外患罪、国防力破壊罪により起訴

された。しかし、1945年4月23日に設定された審問を行うことはできなくなったので、大部分のメンバーは生き延びることができた。ユダヤ人は強制収容所に入れられた。ヴェルナー・シャルフはザクセンハウゼン強制収容所で殺害され、ゲルハルト・グリューンとフランシア・グリューンも同じく殺害された。エーディット、クルト・ヒルシュフェルト博士、シュテファン・シャルフ、ルートヴィヒ・リヒトヴィッツ、アレクサンダー・ロートホルツとハンス・ローゼンタールはゲシュタポに逮捕されず、生き延びることができた。フランクフルト近郊に暮らしているオイゲン・ヘルマン・フリーデは『小躍りする暇はない』という著書のなかで、自らの体験とグループの活動を印象深く描いている。ハンスとフリーダ・ヴィンクラーは1982年にヤド・ヴァシェムで顕彰された。

## 12. 迫害された同僚との連帯——ズザンネ・マイヤーの救済

ズザンネ・マイヤーは、ウルシュタイン出版社の編集長であるユダヤ人、ヴィルヘルム・マイヤーの未亡人だった。彼女は1942年秋の夫の死後、ベルリンにひとり残されたが、ホロコーストを生き延びることができた。20人以上の勇気ある男女に支えられたからである。そのなかにはウルシュタイン出版社の以前の同僚や他のジャーナリストもいた。

1930年代後半、ヴィルヘルム・マイヤーには、彼と家族にドイツでは未来がない、ということがますますはっきりしてきたので、家族とともに移住する可能性を探った。しかし、移住先探しの苦労のためもあり脳卒中を発症し、左半身が麻痺し、移住の試みはすべて失敗に終わった。妻のズザンネは、介護を必要とする夫のためにベルリン残った。13歳の息子、ハンス・ウルリヒは、開戦前に子どもの移送で安全なイギリスに送られていた。

1941年10月、ユダヤ系住民のドイツ全土にわたる強制移送が始まると、重病だが意識ははっきりしていたヴィルヘルム・マイヤーは、親戚や友人



が次々に消えていくのをベッドから見送るはめになった。友人たちはアメリカへの移住に成功するか、「移送」されるか、のどちらかだった。義父母と義兄弟がプレスラウから強制移送されたことで、マイヤーは最後の生きる意欲を奪われた。

マイヤーと妻は、強制移送のため出頭するよう二度命じられたが、二度とも撤回された。やせ衰え、半身麻痺で死にかかっている病人である夫は移送に耐えられず、妻は夫の面倒をみなければならなかったからだ。マイヤーは1942年10月19日、死去した。ユダヤ人墓地の管理部は、埋葬のあと埋葬された人のリストをゲシュタポに提出する義務があった。その日のうちに埋葬者の妻に対する強制移送免除扱いが停止されるのである。そのため、妻のズザンネは、埋葬の日を先延ばしにするように頼んだ。厳しい冬だったので、遺骨は1943年2月28日になってようやく、ベルリン・ヴァイセンゼーにある両親の墓に埋葬された。ズザンネ・マイヤーはとっくに地下潜行したあとだった。

戦後、彼女が冷静な記録者として書いたドラマチックな生存物語は、さまざまな場所での20人以上にもおよぶ救済者たちの織り成すドラマに光を当てたものである。彼らは、世界観がまったく異なり、社会的出自もさまざまな一団である。ただ共通しているのは、自らにおよぶリスクを顧みず、迫害されたユダヤ人を救いたいという気持ちと、ナチス体制の政策に反抗する気構えだった。

ズザンネ・マイヤーに地下潜行するよう説得した最初の男は、社会民主主義者で「前進」の前の編集長、アロイス・フロラートである。居酒屋の常連席で、アロイスは1942年秋、ベルリンのユダヤ人移送に護衛役として動員された老警部の話を聞いた。ポーランドでの「ガスが出るバス」による殺害実験の話だった。アロイスはズザンネに、息子のために生き延びなければならない、と説得した。もともと、彼もその時には彼女の隠れ家を

見つけてはいなかったのだが。

その折、1934年まで風刺雑誌「ふくろう」の編集長だったフリードリヒ・クローナーが決定的な支援をしてくれた。1942年11月、クローナーはズザンネにある男を紹介した。その男は必要なコネを持ち、ズザンネを助けたいという明らかな意志を持っていた。クローナーの住まいで彼女との相談のため、その男、エドゥアルト・シュタットラー博士が現れた。彼の政治的過去は、高貴な救済者にふさわしいものとは言い難かった。シュタットラーは1933年4月、ドイツ国家主義民族党の国会議員団指導部に加わり、同党のナチス党への合流を主導した。ヒトラーが自分に好意を持っている、という示唆を受け、ウルシュタイン出版社の「政治的助言者」の地位に応募し、自分なら倒産の危機にある出版社を立て直すことができる、と吹聴した。しかし、1943年に強制接収で出版社が解体されると、シュタットラーは追い出された。1935年にナチス党に入党していたことも、出世の役に立たなかった。それから何年か、妻の故郷のデュッセルドルフでつましい暮らしをした。

1942年11月、このようなシュタットラーが潜行生活のズザンネを救うキーパーソンになった。シュタットラーは、1942年暮れにノイマルクの地所を隠れ家として提供した。それ以前に、カトリック神父で詩人のヨーゼフ・マティアス・トレッセルを介して偽の証明書を手に入れようとしたが、うまくいかなかった。トレッセル自身が危険な状況になったからだ。トレッセルは、ベルリン・ヴァイセンゼーのカルメル女子修道院の聖職者で、カトリックの抵抗グループ「ウナ・サンクタ」のメンバーだった。シルドウにある彼の丸太小屋は、非合法的な生活をしているユダヤ女性たちの隠れ家になっていた。もうひとりの救済者、のちにズザンネの夫になる劇場美容師アルトゥーア・ファイトが、ズザンネに「シャルロッテ・クローゼ」という名前の偽りの出生および洗礼証明書を手配し、彼女の仮面をつけた非

合法生活は1943年1月7日に始まった。

別れを告げるため、ズザンネはその一日前にテオ・マティコと妻でウーファ映画社の新人女優エーリカ・フィードラーを訪ねた。彼らもまたマイヤー夫妻にとって常に信頼できる友人だった。1938年、マティコは「国防軍」誌に雇われ、第2次世界大戦の全局面を最後の年の最終号までデッサンを同誌に寄稿することで体験した。戦時下の最初の2年間、彼は定期的にもとの同僚マイヤーのもとを訪れ、ユダヤ人にはすでに手に入らなくなっていた食料を運び、国防軍、前線、官房から得た情報を伝えた。

1943年1月7日の朝、ズザンネは黄色い星をつけずに家を出て、ツォー駅に向かった。そこにクロナーが待っていて、彼女をキュストリンの方へ連れて行った。ヴァルテ川沿いのランツベルクの近くで、彼女はシュタットラーが保証した保守的国家主義者で領主、ハンス・ヴォルフガング・レントと妻のインゲボルクに出迎えられた。4人の子どものいる夫婦だったが、彼らは面識のないユダヤ女性、ズザンネをリプキにある騎士領に受け入れた。彼ら以外にズザンネの素姓を知っているのは、領地の監督だけだった。6週間後にレントの周辺で逮捕者が出たため、レントのところにとどまることは危険になり、ズザンネは急いでベルリンに戻らなければならなくなった。

今度も彼女の隠れ家を手配してくれたのは、シュタットラーだった。短期間、彼の友人、パチェンスキー将軍の未亡人のところにかくまってもらうようになった。また、フローナウのシュタットラー自身の住まいでも彼女をかくまってくれ、最後にデュッセルドルフの隠れ家を紹介してくれた。非合法の彼女は、ベルリン空爆の避難民という触れ込みでテルヴォルト家に受け入れられた。一家はシュタットラーの妻の親戚で、全員が敬虔なカトリック教徒だった。終戦後、エドゥアルト・シュタットラーはベルリンでソ連軍に逮捕され、1945年夏、ザクセンハウゼン収容所で死亡した。

数か月後、ズザンネはベルリンに戻り、アルトゥール・ファイトのメレンゼー湖畔の週末用別荘に身を隠した。アロイス・フロラートの紹介で、彼女はラインスベルク近郊の村、カーガルに行った。そこは、非ユダヤ人で反ナチスの人々の避難所になっていた。ベルリンでは目立ってしまうので、フロラートはそこに身をひそめていたのだった。彼はカーガルで下宿人用の部屋もある旅館を営むシュテフェン夫妻のところ暮らししていた。フロリアンはズザンネのことを、映画の脚本をタイプしてくれる秘書と称していた。

豪農、穀物商人、宿経営者のシュテフェンは、ユグノーの先祖たちと同様に村長だったが、ナチス時代には党地方支部長でもあった。シュテフェンはしかし、妻と協力して政治的被迫害者や人種的被迫害者を自分の家にかくまった。そのなかに、のちに西ベルリン市長を務めたオットー・ブーアがいる。ゲオルク・シュテフェンの運命は、ドイツ戦後史の悲劇のひとつである。戦後、彼は市長となったが、彼をねたんだ住民からソ連占領軍に密告され、ザクセンハウゼンの収容所に収容され、半年後に飢餓と衰弱のため死亡した。ヒューマニズムの行為が必要とした時代に、それを行ったシュテフェンに対する公的な顕彰はまだ行われていない。

1944年12月、アロイス・フロリアンが病気のため死去したあとも、妻のエルゼがズザンネを秘書と称し続けた。カーガルには、1933年まで同じく「前進」に寄稿していたベルリンのジャーナリスト、ヘルタ・ツェルナも住んでいた。彼女と母親は、村の小さな家に住んでいたが、終戦までの数週間、ズザンネの信頼できる救済者だった。

戦闘の終了後、ズザンネはカーガルからベルリンにやっとの思いでたどり着いた。その後まもなく息子を6年振りに抱き締めることができた。息子はイギリス兵として故郷のベルリンに進駐していたのだ。2年後、ズザンネは新しいパートナーとベルリンをあとにし、スイスに居を構えた。

以上見てきたように、ベルリンのユダヤ人救済者の世界観と身分は、人数の多さに比例して実に多様である。彼らの世界観は様々で、共産主義者、社会民主主義者、自由主義者、キリスト教徒、それどころか保守的国家主義者もいた。身分もさまざまで、カトリック神父、プロテスタント牧師、大地主、貴族、指揮者、上級公務員、ジャーナリスト、看護師、労働者、それどころか迫害されたユダヤ人自身が救済組織を設立し、他のユダヤ人の救済した例もある。そのような多様なユダヤ人救済者の共通点はなんだったのだろう。まず、自らの危険を冒して、命懸けでユダヤ人同胞を救いたいという固い意志があった。さらに、根底にあるのは、人間性を基礎とするあらゆる倫理規範を無視し、抑圧体制を構築し、ユダヤ人や異なる世界観を持つ人々を迫害し、戦争で他民族を殺害し恥ずることのないナチス体制に対する抜きがたい抵抗心である。その意味で、第三帝国の首都であったベルリンは、微かではあるが、消えることのない光を放ち続けた人間性の首都でもあったと言えるだろう。

#### テ ク ス ト

Arno Lustiger: Rettungswiderstand—Über die Judenretter in Europa während der NS-Zeit, Wallstein Verlag, 2011.

